

私たちの武器は肉のものではない ルカ10:1～11、16～20 / 李正雨師

今日の福音書では、イエス様が弟子70人を派遣なさる場面が出ています。この派遣は「その後」という言葉と共に行われますが、「その後」というのはイエス様が厳しく弟子の道について語られた後という意味です。先週、私たちは2つの「厳しさ」について御言葉を分かち合いました。一番目は、サマリア人についての弟子たちの「厳しさ」であり、二番目は、弟子の道についてのイエス様の「厳しさ」でした。イエス様は、弟子の道が決して容易ではないことを、弟子なら、何を最優先におくべきかを言われました。そして「鋤を手にかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」という言葉によって弟子の道についてのお話を終えられました。今日の福音書は「その後」、弟子の道についてのお話が終わった後のことです。つまり、弟子への教えと戒めが終わってから行われたことだということです。

私はこのような状況を見ながら、まるで軍隊を訓練し、戦場に派遣するようだと思いました。当時の軍隊は、今とは違いました。常備軍が多くいなかったの、一般の人が戦争に参加するしかありませんでした。常備軍と一般人の組み合わせ、これが当時のほとんどの軍隊の姿でした。だから戦場に出る前に、精神教育をするのが大事に思われていました。これは初期のローマも同じでした。初期のローマも十分な常備軍を備えていなかったの、一般人の戦争の参加が必要でした。それでローマは、軍隊に十分な武器と装備を支援しただけでなく、精神的にも士気を高めさせました。兵士には共同体と家族のために戦うということを強調し、戦場に出た回数が多ければ多いほど、それに相当する権利を与えました。そして、他の国々とは違って、出身や血統でローマ人、非ローマ人を分けませんでした。ローマ人たちが思っているローマの市民は、志を共にする人でした。肉体的なものではなく、精神的なものを大切に思ったのです。イエス様の派遣の過程もこれと同じだったと思います。厳しい言葉によって弟子たちを精神的にしっかり武装させ、弟子としてやるべきことを思い出させました。そして、一人ではなく二人と一緒に遣わされました。互いが精神的に頼り、協力できるようになさったのです。まるで戦場に兵士を派遣するように、イエス様は弟子たちをすべての町や村に遣わされました。

しかし、イエス様の派遣が軍人の派遣と違ったのは、イエス様の派遣の目的は、戦争や対立するためのものではなかったということです。一般的に戦争をするには、人的資源だけでなく多くのリソースが必要です。これを兵站と言いますが、兵站がなければ戦争で勝利することはできません。しかし、イエス様はこの兵站を準備してはならないと言われます。今日の福音書4節と8節の言葉です。「財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。」「どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、」。弟子たちには、準備についてどれも許されませんでした。なぜなら、この派遣は対立して勝つためのものではなく、平和のためのものだったからです。

今日の福音書5節には、この派遣の目的が書かれています。「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和がありますように』と言いなさい。」平和を伝えること。これは派遣された弟子たちがすべきことでした。そして弟子たちは、このことによって自分たちが何をすべきかを悟ることができたと思います。平和を求め、平和を伝えることがこれからの弟子たちの働きになるのです。当時のユダヤ人たちは、「平和」という言葉を口癖のように言っていました。彼らの挨拶は「シャローム」という言葉ですが、これは「平和」という意味です。そしてユダヤ人たちの神殿があるエルサレムも、「イル(ירושלם)=都市、シャライム(שָׁלוֹם)=平和」、平和の都市という意味を持っています。しかし皮肉なことに、彼らは自分たちが口癖のように話していた平和を求めていませんでした。相手がサマリア人でも異邦人でも、それとも自分たちが恐れていたローマ人でも、彼らと平和の関係になることを望んでいませんでした。ユダヤ人にとっての平和というものは、自分たちだけの平和でした。神様を自分の味方にして、他の民族を屈服させ、治めることが彼らの平和でした。平和の関係になるのではなく力によって勝ち取る平和！これが弟子たちを含めたユダヤ人が夢見る平和でした。

イエス様はこのような考えを持っている弟子たちに、全く違う平和を伝えなさいと言われました。何も準備せず、家と村に行って平和を求めなさいと言われました。そして、彼らが弟子たちを迎え入れたら、その家と村から出される物を食べ、また飲みなさいと言われます。これらのこと、つまり平和を伝え、平和の関

係になるのは、彼らが望んでいたものではありませんでした。さらに、ユダヤ人は食べ物と飲み物に敏感でした。レビ記11章にはユダヤ人たちが食べても良い物と食べてはならない物が書かれており、汚れた物が泉や池に落ちた場合はその水も飲んでなりませんでした。イエス様の時代のユダヤ人たちも、これを大切に思い、守っていました。ところが、イエス様はその家や町から出される物を食べ、飲みなさいと言われました。今日の福音書には、弟子たちが派遣された場所がどこなのかが書かれていません。ユダヤなのか、サマリアなのか、異邦なのか、それとも律法を守っている所か、そうではない所か、分かりません。派遣された弟子たちも、自分たちがどこに行くようになるかは、分からなかったでしょう。しかし、確かなことは、派遣された所と関係なく、その家と村がイエス様の平和を受け入れたら、弟子たちはその家から出される食べ物を食べ、飲み物を飲まなければなりませんでした。これは、イエス様の平和がユダヤ人たちが望んでいた平和ではないことを、すべての人のための平和であることを示しているのだと思います。

そして弟子たちは、これらのことを通して、真の平和が何なのか、平和の関係が何なのかが分かるようになるでしょう。この交わりを通して、キリストの平和の真価が現れ、伝える者も、受け入れる者も、みんな神様の平和を悟り、その平和を得ることになるのです。これがイエス様が弟子たちを派遣なさった理由だと思います。しかし、皆がイエス様の平和を受け入れるわけではありません。イエス様のことをよく知らない人もいますし、受け入れたくない人もいます。それでも、弟子たちは彼らと対立してはいけません。10～11節にはこう書かれています。「しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場に出てこう言いなさい。『足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいたことを知れ』と。」

この言葉、特に「足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す」という言葉は、多くの人々に違和感を感じさせることがあると思います。この言葉は、イエス様を受け入れなかったことについての裁きとして読まれることもあるからです。しかし、この言葉の解釈はさまざまです。私はこの言葉が裁きではなく、弟子たちの責任に関する言葉だと思います。ユダヤ人の伝統では、足についた埃を落とす行動は、自分と関係ないことを示すことです。弟子たちはこのような行動をすることによって、平和を伝えられなかったこと、つまり自分たちの失敗に責任を負わなくてもいいのです。イエス様が命じられたことを成し遂げられなかったとしても、弟子たちの責任ではないということです。しかし、イエス様はご自分の平和を受け入れられなかったことを残念に思われたと思います。それでイエス様は「しかし、神の国が近づいたことを知れ」と伝えなさいと言われたのでしよう。

今日の福音書17節からは、イエス様の派遣の結果が書かれています。派遣された70人の弟子たちは、喜んで帰って来て、イエス様に報告します。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」すると、イエス様は、弟子たちの働きによって起こった霊的なことを教えてください。サタンが稲妻のように天から落ちるのを御覧になったということです。しかし、これは弟子たちが喜ぶべきことではありませんでした。イエス様は、サタンを落とし、悪霊を屈服させることよりも弟子たちが喜ばなければならないのは、彼らの名前が天に書き記されたことだと言われます。戦いの勝利よりも大切なこと、それは弟子たちに与えられた本当の平和である救いでした。

使徒パウロはコリントの信徒への手紙二10章3～4節で、こう語ります。「わたしたちは肉において歩んでいますが、肉に従って戦うではありません。わたしたちの戦いの武器は肉のものではなく、神に由来する力であって要塞も破壊するに足ります。」この言葉のように私たちの戦いは、肉に属するものではありません。神様を自分の味方にして勝利することでも、力によって勝ち取ることでもありません。皆の平和のためであり、霊的なものです。そのため、この世の戦い、戦争とは全く違うものだと言えます。そして、私たちクリスチャンは、イエス様からこの戦争、平和と救いのための戦場に遣わされました。多くの人に平和を伝えるために、この世に戦争ではなく平和をもたらすために遣わされたのです。それで私たちは、喜びをもってこの戦いに臨みます。イエス様に遣わされた者として、憎しみがあるところに愛を、争いがあるところに赦しを、分裂があるところに一致を、疑いのあるところに信仰を、誤りがあるところに真理を、絶望があるところに希望を、闇あるところに光を、悲しみあるところに喜びを伝えるために戦場に進んでいるのです。この戦いで平和を成し遂げられる皆様になりますように。福音によって、この世の風潮に立ち向かう皆様になりますように、主の御名によって祈ります。アーメン